武満徹
夢窓

京都信用金庫の創立60周年を記念して交響的三部作『京都』と名付けられた企画のために3名の作曲家に委嘱が与えられた作品のひとつが、この作品である。他2名の作曲家は、武満により選ばれたカナダ人のマリー・シェーファーとフランス人のトリスタン・ミュライユであった。作曲家の3名は京都で顔合わせをし、各々が京都から受けた印象をもとに作曲し、1985年に京都市交響楽団により初演された。

タイトル《夢窓》は、京都の庭からのアイデアで、西芳寺の庭を作庭した禅僧の夢窓疎石（1275-1351）に因んでいる。『夢と窓は、内と外へ向う二つの相反するダイナミズムの暗喩として用いられている。この内（インテリア）と外（エクステリア）を同時に響かせる事が、曲の主眼である。』と、武満は哲学的な思考について述べる。彼は、庭を夢（想像の世界）の中と、窓（現実的な物質や景色の理性的な見方）を通して創造している。内と外のコントラストは、オーケストラの空間的な音響配置にも見られる。フルート、クラリネット、弦楽四重奏の独奏楽器群は、指揮者近くの舞台前方中央に設置し、夢の中で聴かれる“内”なるミニチュア・オーケストラを意図する。2台のハープ、チェレスタ、ギターは、その背後に位置する。“外”なる大オーケストラは、窓から理性的に見られるように聴かれ、それらの楽器を囲み込む。2群に分かれた弦楽器が管楽器、打楽器を間においた左右に配置される。18年前に書かれた《ノヴェンバー・ステップス》と似たようなシンメトリカルな配置となっている。音が立体的に移動することを想定した楽器配置で、彼の好んだ回遊式庭園で時間の経過によって徐々に変容していく風景を見るように、音の微妙な変化に耳を傾けて欲しい。

作曲：1985年
初演：1985年9月9日　京都（小澤征爾指揮／京都市交響楽団）
楽器編成：フルート3（ピッコロ持替2、アルト・フルート持替1）、オーボエ3（イングリッシュホルン持替1）、クラリネット3（バス・クラリネット持替1）、ファゴット3（コントラファゴット持替1）、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、ティンパニ、バス・ドラム、サスペンデッド・シンバル2アンティーク・シンバル、チャイニーズ・シンバル、トライアングル3、ゴング3、タム・タム、チャイム、グロッケンシュピール、ヴィブラフォン、弦5部
【中央別配置】フルート、クラリネット、ハープ2、チェレスタ、ギター、弦楽四重奏

伊藤美由紀（作曲家）

ハインツ・ホリガー
デンマーリヒト（薄明）

この作品は、サントリーホール委嘱作品として書かれ、2015年に東京交響楽団によりサントリー芸術財団サマーフェスティヴァルで作曲者の指揮により初演された。また、作曲者本人によりドイツ語で書かれた5つの俳句をテキストとしている。俳句は、1991年大晦日に東京の皇居の庭園でイギリス室内管弦楽団との公演ツアー中に、彼の敬愛する師であり1992年に亡くなったハンガリー人作曲家、シャーンドル・ヴェレシュの死の予感を感じながら書かれた。そして、能、雅楽、舞楽、文楽の音楽の神秘を教えてくれた親愛なる武満徹への思い出に捧げた作品となっている。

俳句の構成に従いドイツ語による17音節のテキストは、メリスマティックな（1つのシラブルに対して異なった音高の音を続ける）歌い方を主体に母音、子音でグリッサンドや息のような音も含めて複雑に動く。木管楽器のホイッスルトーン、ピッチのない息のような音やリードを外して生じる倍音、金管楽器の異なるミュートの使用によって生み出される音、弦楽器の上下に動くグリッサンドによって生じるピッチの不明瞭な音、各々の楽器の複雑なハーモニクス、4名の打楽器奏者の特殊奏法による多様な種類の打楽器の音など、全ての楽器が複雑な音構造を展開し、「薄明」の雰囲気を表現する。絶えず変化する拍子、複雑な時間設定により、朝と夜の間の推移で感じられる曖昧な感覚を不明瞭で漂うような音響で創造している。俳句や日本の文化で重要とされる「音」と「間」のコントラストを、作曲者自身の俳句を使って流動的な雰囲気で音楽的に表現しようと試みている。

作曲：2014-15年
初演：2015年8月27日　東京・サントリーホール（作曲家本人の指揮、サラ・マリア・サンの独唱／東京交響楽団楽団）
楽器編成：ソプラノ独唱、フルート3（ピッコロ持替1、アルト・フルート持替1、バス・フルート持替1）、オーボエ、イングリッシュホルン、クラリネット、バス・クラリネット、コントラバス・クラリネット、ファゴット、ホルン3、トランペット3、トロンボーン3、テューバ、ティンパニ、クロテイル、マリンバ、チューブラー・ベル、サスペンデッド・シンバル、ウォーター・ゴング、タム・タム3、トム・トム、バス・ドラム、メタル・チャイム、マラカス2、ウッドブロック、オーシャン・ドラム、レイン・ツリー、ウッド、ハープ、ピアノ、チェレスタ、弦5部

ハインツ・ホリガー
デンマーリヒト（薄明）－ソプラノと大管弦楽のための5つの俳句

H. Holliger　Dämmerlicht－Fünf Haiku für Sopran und großes Orchester

俳句：ハインツ・ホリガー
日本語訳：石川亮子

1. Rabenauge, starr
wirft das Dämmerlicht zurück
lidlos, tränenlos

1. カラスの目、まっすぐに
薄明をはね返す
縁なく、涙なく

2. Rose, spät erblüht
Abendtau der nachts gefriert
“Hüt’dich schön’s Blümlein!”

2. 薔薇、夕べに咲き
夜露、夜に凍える
「自らを守れ、美しき小さな花よ！」

3. Sonnenuntergang.
Raben graben – wessen Grab?
Du weisst es – morgen

3. 落陽
カラスは掘るー、誰の墓を？
君は知るー、明日に

4. Brüchiger Holzsteg
über tiefedunkle Wasser
sag’, was ist jenseits?

4. 深く暗い水にかかる
濡れた木の端
教えておくれ、あの世とは何なのか？

5. Einsame Wölkchen
am roten Abendhimmel:
Seelen ziehn heimwärts

5. 赤い夕べの空の
孤独な小さな雲
魂を連れて行く、故郷へと

伊藤美由紀（作曲家）

シューベルト
交響曲第８番ハ長調『グレイト』

シューベルト（1797-1828）31年の生涯、完成された最後の交響曲がこの作品である。ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェンの影響が反映されている。シューベルトは、古典派とロマン派の過渡期に生きた作曲家であり、その両方の魅力を備えた作曲家でもある。尊敬するベートーヴェンに負けない交響曲作曲家をめざし、その影響としてベートーヴェンの《交響曲第9番》の第4楽章、『歓喜の歌』が、第４楽章に引用されている。シューベルトも出席したベートーヴェンの第9番の初演された次の年にこの作品を書き始めたと言われることからも、ベートーヴェンへの敬意の深さが伺われる。

シューベルト死後10年に、シューマンが、直筆譜を継承した兄に見せてもらい、この作品を見つけ出した。そして、メンデルスゾーンに渡し初演されることになり、シューベルトの傑作のひとつとして演奏される機会の多い作品となった。小規模な第6番のハ長調交響曲と区別するために、大規模なこの作品は、通称「グレイト」と呼ばれて親しまれている。シューマンは、「天国的な長さ」と表現している。4楽章構成の古典的な編成で、ベートーヴェンの後期作品では限定的に音響効果としてしか使用されていなかったトロンボーンを、シューベルトは、効果的に応用し重要な旋律の役割を与えている。また、オーボエが全体を通して重要な役割を担うのも特徴である。600を超える歌曲を作曲し、歌曲を得意とするメロディ-メーカーでもあるシューベルトの魅力がこの作品にも生かされている。また、同音反復の主題も全楽章通して特徴であり、効果的に変容されている。彼の作品の中で最も革新的な作品のひとつと言っても過言でないであろう。

シューベルトは生前、交響曲に番号をつけておらず、時代とともに番号が変遷してきた経緯がある。最近では、国際シューベルト協会の1978年の作品目録改訂に基づいて8番が定着している。

第1楽章：ハ長調。序奏付きソナタ形式。緊張感のある長い序奏で、冒頭のホルン2本のユニゾンによる8小節の旋律は、全曲を通して部分的に現れ重要なモチーフとなっている。第１主題は、特徴的な付点リズムの弦楽器が木管楽器の3連符による同音連打を伴って発展していく。第2主題は、属調ではなく3度上のホ短調で、物悲しくメランコリックなオーボエによる旋律ではじまる。その後、トロンボーンによる旋律が加わり盛り上がっていく。展開部では、それぞれの主題が絡み合い転調を重ねる。再現部では、第2主題がハ短調で、コーダでは、冒頭の序奏の旋律が現れる。

第2楽章：イ短調。ABABA（コーダ）による三部形式。低弦による導入的な刻みから始まり、主題Aは、オーボエによるリズミカルでスタッカートが特徴的な哀愁漂う魅力的な旋律。主題Bはヘ長調でチェロ、コントラバスを伴った第2ヴァイオリンによる息の長いレガートの下降旋律。

第3楽章：ハ長調。スケルツォ部分の歯切れのよいリズミカルな冒頭主題は、弦楽器と木管楽器で対話される。トリオ部分は、イ長調で24音のホルンによる同音連打で始まり、流麗で優美な旋律によるレントラー風舞曲。

第4楽章：ハ長調。自由なソナタ形式。付点リズムによるファンファーレ風の旋律が、3連符の音形を伴った第1主題で始まる。第2主題は同音連打による音形で、ホルンのみで始まる。展開部は、クラリネットでベートーヴェン第９番の「歓喜の主題」を引用した旋律で始まり、ベートーヴェンのオマージュとなっている。再現部では圧倒的なクライマックスを構築し、情熱的に終わる。

作曲：1825-26年
初演：1839年3月21日　ドイツ・ライプツィヒ（フェリクス・メンデルスゾーンの指揮／ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団）
楽器編成：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦5部

伊藤美由紀（作曲家）

『武満徹の想い出。そして、武満の夢。』

・「想い出」

武満徹が1996年に亡くなり、既に23年が経つ。武満徹に私が始めて会ったのが、オープンしてまだ間もない名古屋のしらかわホールで1995年に開催された『コンテンポラリー・ミュージック・シリーズ（I）武満徹作品集』の公演である。本人によるトークを拝聴し、感動した覚えがある。同年秋、ニューヨークに留学した当初、大学寮のカフェテリアで注文した際に、何を専攻しているかを聞かれて作曲と答えると、武満徹の音楽は素晴らしいとの応えが返ってきて衝撃をうけた。日本では、音大生でも作曲の学生以外には、武満の名前を知っている学生は少なかった当時、音楽の専門家でないアメリカ人に武満について語られたことが驚きであった。確かにニューヨークでは、音大生の間でも武満作品は人気がありコンサートで度々取り上げられていた。また作曲の学生の間では、日本人の作曲家＝武満というくらい敬意を払われていた。

そして翌年の1996年に亡くなってしまった事実は更に衝撃であった。「西洋で有名になった初の日本人作曲家」として紹介され、ニューヨーク・タイムズでも大きく取り上げられたのを覚えている。ストラヴィンスキー、アーロン・コープランドに作曲家として認められた後、ニューヨーク・フィルハーモニックに委嘱をもらい尺八、薩摩琵琶とオーケストラという当時、斬新な編成とアイデアで作曲された《ノヴェンバー・ステップス》で国際的地位を築いた。武満の作品に特有な西洋の作曲家の作品にはない音響、時間的感覚、日本的感性、美学が、西洋人にとっては、ユニークで魅力的にうつったことであろう。彼の存在が、西洋の音楽家たちに与えた影響は多大である。

同年、武満を偲んでニューヨークでは彼の作品を特集した公演が多々あり、当時、コロンビア大学のドナルド・キーン・センターの所長であり、武満と交流のあったピーター・グリリにより監修された貴重なビデオ『Toru Takemitsu: Music for Movies』もアメリカで英語字幕付きでリリースされた。映画に対してどのように音楽を作ったかという、彼の関わった各々の映画監督と武満による対談を含み、時代背景、彼の音楽への関わり方、音楽観がわかる貴重な資料である。

その後、武満徹が取り組む予定であったオペラ『マドルガーダ』（台本：バリー・ギフォード）を、野平一郎が引き継ぎ、2005年ドイツのシュレスヴィッヒ・ホルシュタイン音楽祭で初演された。この英語の台本の日本語訳を野平氏に頼まれて筆者が引き受けている。映画や舞台芸術にも詳しい武満がどのようにオペラを構想していたのか気になる。

今回、名フィル第472回定期演奏会では、武満徹の《夢窓》が取り上げられる。京都信用金庫の委嘱作品として武満徹と同時に、彼に選ばれた2名の作曲家の一人、トリスタン・ミュライユは、私の作曲の師匠である。その時のミュライユの作品は《航跡》。今回、曲目解説の執筆にあたり、始めてミュライユが武満に選ばれ交響的三部作『京都』の企画として作品を書き、京都に来たことを知った。ミュライユが来日した経験があり、武満とも交流があったことは、学生の頃に聞いて知っていたが、日本文化に対する造詣の深さや、日本語も少し理解できたのは、このような理由であったのだと今回気づいた。留学当時、日本では学べない西洋の最先端の作曲家たちの作品の知識を得ることに一生懸命であったので日本人作曲家の情報

をわざわざ追求しなかったのであるが、西洋人を通した武満像や、彼の音楽について色々と質問をすればよかったと今、思う。

間接的ではあるが、このように武満徹に関わることができたのは嬉しい想い出である。また、武満が海外に与えた日本人作曲家のポジティブで好意的なイメージは、その後の日本人作曲家の活動にもプラスになり現在の国際的な活動へとつながっている。

・「夢」

武満徹の作品タイトルは、視覚的聴覚的イメージをかきたたせる詩的なものが多い。そして、いくつかのテーマに基づいたタイトルによる作品シリーズがある。最初に思い浮かぶのが、ドビュッシーら印象派の作曲家たちを含め数々の作曲家たちのテーマとして取り上げられる「水」であろう。例をあげると、リストの《エステ荘の噴水》、ラヴェルの《水の戯れ》、ドビュッシーの《水の反映》が「水」で有名である。「水」に関して、「雨」や「海」と言ったタイトルを用いた作品が、武満にもたくさんある。

今回のプログラムにある武満の作品《夢窓》に関連し、「夢」がタイトルについている作品は、《夢窓》(1985)以外に、オーケストラの為の《夢の時》(1981)、ギターとオーケストラの為の《夢の縁へ》(1983)、ハープシコードの為の《夢みる雨》(1986)、フルートとオーケストラの為の《ウォーター・ドリーミング》(1987)、2台ピアノとオーケストラの為の《夢の引用》(1991)の6作品。《夢みる雨》と《ウォーター・ドリーミング》は、「水」と「夢」の2つのテーマを兼ねている。彼の他のテーマでは、「庭」「星」「環」をタイトルにもつ作品群がある。各々のテーマは、武満にとって普段から意識しているアイデアであり、彼の音楽観の根幹に存在するものである。たとえタイトルになくともそれらのコンセプトは、意識的、無意識的に彼の個性として作品に含蓄している。その一つに回遊式庭園がある。そこからイメージされた多層的な時間をステージ上の楽器配置を工夫することで空間的な音響の交錯を試みている。又、詩人の瀧口修造と知り合って以来、シュルレアリスムの詩や美学に魅了されたこととも関係して、武満の作品で「夢」の概念は重要な要素となっている。

FM番組「名フィル クラシック・スクエア」 好評放送中！

@FM 80.7

毎週日曜日の朝にお送りしている名フィルのラジオ番組「名フィル クラシック・スクエア」。名フィルの演奏音源や演奏会情報などを交えながら、クラシックの魅力や豆知識をお贈りしています。日曜の始まりに、ぜひお聴きください！

名フィル クラシック・スクエア
・放送局：@FM 80.7(エフエム愛知)
・放送日：毎週日曜日 7:00am～7:30am
・パーソナリティー：大島由美子
・名フィル・バイザー(番組アドバイザー)：
田中宏史(首席トロンボーン奏者)
小出篤(事務局)

聞き逃してしまっても大丈夫！
パソコンやスマートフォンのアプリ「ラジコ」で
お聴きいただけます！

radiko.jp ラジコ 検索

番組提供：岡谷鋼機株式会社

OKAYA & CO.,LTD.

since 1669

グローバル最適調達パートナー
岡谷鋼機株式會社
本社／名古屋市中区栄2-4-18